

ぶんけい

教育ほつとにゅーす

かわら版

こみち
教育の小径

2月号

2012
FEBRUARY
No.40

今月のことば

論より証拠

あだこうだと議論することより、根拠となる証拠を示すことによって何ごとにもハッキリすることです。議論を通して立証するという意味ではありません。江戸で流行した「いろはかるた」の「ろ」の読み札です。

今月の記念日

建国記念の日(2月11日)

建国をしのび、国を愛する心を養うという趣旨で、昭和41年(1966年)に制定され、国民の祝日になりました。元の紀元節にあたる日です。この日は「日本書紀」にある神武天皇が即位したとされる日に由来しています。



国士館大学教授
北 俊夫先生

今月の
テーマ

「教科書が終わらない」の声

- 教科書を丁寧に教えるほど時間が足りなくなります。その結果、教科書が終わらなくなる恐れがあります。これは教師が抱えるジレンマです。
- 教科書の内容を終わらせるためには、教科書を「教材」としてとらえ、年間を見通して教材の精選と重点化を図ることが大切です。

計画どおりに進まない

年度の始めには、各教科等の年間指導計画を作成し単元や題材ごとにより具体的な指導計画を作成して指導してきました。学校の教育活動は意図的、計画的な営みですから、指導計画は不可欠なものです。

ところが計画どおりに進まないのが教育です。生きている、しかも多様な子どもを相手にしているからです。つまりいてる子どもがいれば、分からないままにしておくことはできませんから、教師はつまずきを無くすために時間をかけて指導します。子どもが「もう少し詳しく調べたい」と学習意欲を示すと、「いいよ」と言ってつい時間を与えてしまいます。教師が思い入れのある教材にはどうしても計画以上に時間を多くかけてしまいます。

その結果、予定されている指導時間がオーバーし、それらが積み重なって時間が足りなくなってしまう。このことは教科書の内容をすべて扱うことができなくなることであります。学期末や学年末に「教科書が終わらない」という不安に駆られたり、こうし

た経験をしたりした先生方が多いのではないのでしょうか。私ごとになりますが、学年末になっても教科書がすべて終わらなくて焦っている自分の姿がいまも夢に出てきます。現場を離れてすでに四半世紀以上が過ぎているにもかかわらずです。

ジレンマをどう解決するか

教科書は主たる教材としての役割をもっており、教師には教科書の使用義務が課せられています。またわが国には、従来から「教科書を」教えるという考え方が根づいてきました。教科書の内容を隅から隅まで丁寧に教え、身につけさせるものという「教科書神話」も見られました。教科書は絶対的な存在であったと言えます。

一方、教師には教科書の内容をすべての子どもに理解させたい、大切なことや必要なことは、きちんと身につけさせたいという基本的な願いがあります。分からない子どもを分かるようにし、できない子どもをできるようにすることが教師の役割と責任ですから、このことは当然のことです。

「教科書をすべて扱わなければならない」という責任と、「それらをすべての子どもに身につけさせたい」という願いが時にはぶつかり合い、ジレンマを起こします。教科書は学習指導要領を踏まえて、内容的にも時間的にも標準的に作成されています。しかし、それらを学ぶ子どもたちの実態は多様であり、それぞれ違います。

こうしたジレンマをどう解決したらよいのでしょうか。「教科書が終わらない」ということにならないようにするためには、どのような工夫が必要なのでしょう。

一つは、教科書に対する考え方、すなわち教科書観を変えることにあります。「教科書を」教えるのではなく「教科書で」教えるという立場に立つことです。最近、文部科学省もこのことを主張しています。指導目標に照らして、教科書の隅から隅まですべてを扱う必要はないとも言っています。このことは教科書の教材としての役割を一層明確にしたものです。

二つは、教材である教科書の内容の扱い方を精選し重点化することです。具体的には指導時間に軽重をかけることです。子どもの実態や教師の願い、それに地域の実情などを踏まえ、単元や題材の扱い方にメリハリを付けるようにします。そのためには、教材とそれを通して身につける指導内容との区別を明確にすることが大切です。

三つは、予め計画をしっかり立て、日常的に点検と修正作業を行うことです。指導計画を作成するとともに、実施状況を記録するようにします。

三つは、予め計画をしっかり立て、日常的に点検と修正作業を行うことです。指導計画を作成するとともに、実施状況を記録するようにします。

教えて北先生

時間にルーズな子ども

Q. 集会にいつも遅れてくる子どももいます。授業が始まっても教室に入ってこない子どももいます。また下校の時刻になっても、いつまでも校庭で遊んでいる子どももいます。こうした子どもたちはある程度決まっています。時間に対してルーズな子どもたちには、どのように指導したらよいのでしょうか。

A. 「時間を守る」ということは社会生活を送るために大切な基本的なことです。それは自分が規則正しい生活を送るためだけでなく、周囲の友だちと集団生活するために必要な社会的なルールだからです。

学級で時間が守れない、時間にルーズな子どもたちを指導する場合、例えば次のような方法が考えられます。

一つは、学級活動や道徳の時間に指導することです。ここでは、当該の子どもを対象に指導するというよりも、全体の子どもたちに「時間を守ることがなぜ大切なのか」を教材などを使って指導します。子どもの心に響くような教材を活用して、一人一人に自らの行動を見つめさせるようにします。

二つは、当該の子どもに指導することです。その子どもに合わせて個別に指導します。時間に遅れると、誰よりも自分が困ることを繰り返し指導します。周囲の友だちの協力を得る方法もあります。少しでも進歩の状況が見られたときには褒めてやりましょう。

生活習慣を確立させるための指導には時間がかかります。粘り強く、繰り返し指導することが大切です。「時間を守る」ことは自己管理能力を育てることであります。

教育の動向

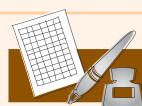
学校トイレの事例集

文部科学省は、『トイレ発! 明るく元気な学校づくり!!』というタイトルの学校トイレ改善の取組事例集を公表しています。トイレは憩いの場、コミュニケーションの場であるとともに、トイレを大切にすることは学校施設全般を大切に使う心を育むものという考え方に立って作成されたものです。

近年、住宅のトイレ環境が飛躍的に向上し、それにつれて駅や公園をはじめ、デパートなど商業施設のトイレが急激に改善されてきました。それに対して、学校のトイレは「汚い・臭い・暗

い」(3K)と言われ、必ずしも子どもたちにとって快適な場ではありません。また洋式のトイレがない。数が少ないなどの問題もあります。学校のトイレは、家庭や他の施設と比べて相対的に整備が遅れていると言えます。そのため、トイレに行きたがらない子どももいます。トイレが壊されるなどの問題が起こることもあります。

本事例集は、各地で行われているトイレ改善にかかわる取組事例をとりまとめたものです。具体的には、世田谷区、葛飾区、川崎市、大阪府箕面市の各教育委員会の取組が紹介されています。これらは、文部科学省のホームページで見ることができます。



コラム 北先生の授業力向上術

授業の記録をとる

授業を行うときには、進め方など計画をノートなどにメモし記録します。ここでいう「授業の記録」とは授業の事前の記録のことではなく、授業が行われたあとの授業の実際で、これを一般に「授業記録」と呼んでいます。

授業をテープに録音し、それをあとで何度も聞き返しなが、子どもと教師の発言をすべて文字に起こすことを「授業記録をとる」と言います。45分の授業を丹念に記録するためには、少なくとも6~7時間はかかります。テープを聞きながら授業を振り返り、自らの指導を反省したり、子どもたちの反応を確かめたりすることができます。

授業では、子どもたちが活発に発言している場面があります。作成した授業記録を丁寧に分析すると、教師が子

どもの興味を高め、発言を引き出す工夫をしていることに気づきます。逆に発言の内容が乏しい場面では、教師の働きかけと子どもの実態との間にズレがあったことに気づきます。10分間の作業時間を与えているにもかかわらず、実際には7分程度でストップをかけていることもあります。

授業記録は実際に展開された授業の事実です。記録から教師と子どもたちのやりとりを分析することができます。授業のあり方や教師の役割を学ぶことができる貴重な「教材」です。

私はかつて社会科を中心に授業記録をとり続けました。当時は、音声だけのカセットテープでした。いまでは、授業を映像として撮ることができますから、よりリアルに授業分析ができます。授業記録をとり、それを分析する作業は授業力の向上につながります。

INFORMATION

すぐに使える 小学校 新指導要録 記入文例集

通知表の作成にも使えます!

◎著者 梶田 毅一
◎企画・編集 ぶんけい教育研究所
◎定価 1,200円(税別)
◎発行 株式会社文溪堂

B5判 128ページ



編集後記

少し前の話になりますが、今年の初詣は治水神社(岐阜県海津市)に参拝しました。宝曆治水に尽くした薩摩藩士 平田靱負を祀った神社です。昨年起こった東日本大震災や紀伊半島の豪雨、タイの洪水のような水害に苦しむことが二度とないよう、願いを込めて祈りました。

(H記)

企画・編集: ぶんけい教育研究所
発行: 株式会社文溪堂
発行日: 2012年2月1日